

「まだ終わらない、終われない」

高校一年 A・H

カナダへの第一歩

翌日が試験だった。憂鬱だった私を、その日家に届いたある一枚の紙切れが喜びと希望で満たしてくれた。その紙にはカナダにいる二週間、私の家族になってくれる人の名前と生年月日、そして住んでいる家の住所が書いてあった。勉強なんてそっちのけで、私は何度もその紙を見つめた。ホストマザーは偶然にも私の母と同一年で、ヨガ講師をしている Leanne Conroy、そして娘の Julia と息子の Jack、愛犬の Maggie の四人家族だった。カナダ語学研修への第一歩を踏み出せたように感じた私は、嬉しくて、すぐにパソコンに向き合い、Leanne Conroy というまだ知って間もない名前を検索に掛けた。「まだ顔も知らなく Leanne Conroy は Facebook をやっているのかな？もしやっているのなら、顔が分かるかもしれない、趣味が分かるかもしれない。」何でも良いから、私を受け入れてくれる家族のことをもっともっと知りたかった。無我夢中になって情報を探していたとき、一枚の写真が目飛び込んできた。一人の女性が優しく微笑みながら、両脇の男の子と女の子の肩に手をおいている写真だ。この三人が知りたかった Leanne 達かもしれない。そう思うと興奮が止まらなかった。その日は三人の家族写真と一緒に写っている自分の姿を想像してばかりいた。私はカナダに語学研修に行く子達の中で一番幸せかもしれない、本気でそう思った。私のカナダ語学研修はある一枚の紙切れと、興奮が冷めることのない想像によって、最高のスタートをきった。

## 緑色の優しい目

カナダに到着して、二日目にはトロントを観光した。きれいという言葉だけでは表しきれないほどの自然に囲まれたトロント大学、CNタワーからトロントを見下ろした時には、日本の敷き詰められたような景色とは全く違う景色が見えた。隙間が多いと感じた。隙間が多く緩やかに見えたその景色はカナダの時間の流れさえも緩やかにしてしまっているように思えた。その後にはブルージェイズの試合を観戦し、ブルージェイズが打ったホームランをカナダ人の方達と一緒に喜びながら、まだ来てから二日もたっていないにも関わらず、わたしは勝手にカナディアンになった気がしていた。

カナダにいる間に私たちが学ぶ学校に向かうまでのバスの中はとても静かだった。ブルージェイズの試合観戦で疲れていたのではない。学校に着いたらはじめてホストファミリーと対面することになるため、緊張していたのだ。「行つてきますすつて英語でなんて言うの?」「ごちそうさまは?」「そんな焦った声がたくさん聞こえてきた。学校に到着すると、welcomeと書かれたお手製のボードを掲げて待っていてくれたホストファミリーがたくさんいた。Anjuと書かれたボードと、あの写真で見た顔を探したけれど見つからなかった。あの写真は別人だったのかもしれないと思った。

日本の学校、カナダの学校の先生方、生徒の代表者からの挨拶があった後、ホストファミリーと初めて対面する時となった。それまであった楽しみが全て消え、私の気持ちは不安だらけになってしまった。名前を呼んでくださる先生の声が聞こえ、呼ばれた方を見ると何度も見返した、想像の中で何度も会ったあの女性の顔があった。そしてその優しいような緑色の目が優しく笑いながら、私をハグしてくれた。これが Leanne が私にくれた初めてのハグだった。

自信をくれて、ありがとう

火曜日に Jack が遠いところに住んでいるお父さんのところから帰ってきて、木曜日に Leanne と一緒に、Julia をトロントにある親戚の家に迎えに行くまで、私は Leanne と一人きりの生活だった。

カナダに滞在中の二週間、ほぼ毎日と言っていいほど、同じく晃華の生徒を受け入れていて近所に住んでいる Kelly と Heather の家族と会って夕食や楽しみを共にしていた。

カナダに来てからの私は、ちゃんと英語が話せているのか不安で、必要最低限のことを小さな声で話すのが精一杯だった。そんな私に比べて、Kelly と Heather の家にホームステイしている友達は積極的に一生懸命自分の思いを伝えようとしていて、その姿を見た私は自分も頑張ろうと思うどころかささらに自信をなくしてしまった。

Leanne と二人で家へ帰る途中、彼女は笑顔で「あなたは私たちの会話を理解できているよ。」と言ってくれた。「あの二人のあなたの友達は大い声で話せている。でもあなただって、ちゃんと英語を理解しているでしょ。分かっているよ。自信を持って。」この言葉に、この笑顔に私はどれだけ自信をもらったことだろう。その後私はこれまでよりも大げさに相づちをうつように心がけた。自分の気持ちを十分に伝えることは私にとってとても難しいことだった。だからこそ、あなたの気持ちは理解しようとしている。そのために頑張っていますよ、という姿勢を見てもらいたかったのだ。

私の拙い英語力を認めてくれ、優しい笑顔で自信をくれた Leanne には本当に感謝している。

謝らなくていいよ

私が特に感じた日本とカナダの違いは、日本人はカナダ人よりも頻繁に謝るということだ。私は、日本と同じ感覚で Sorry. を連発し

ていた。食事を残してしまったとき、Jackと遊びながらコインをどこかへ飛ばして無くしてしまったとき、相手が怒っていないか、嫌われないだろうか、それが心配で謝ってばかりいた。そんな私に、Kellyが「そんなに謝ってばかりいないで、いつも笑っていないさい。」と言ってくれた。時には謝ることもとても大切なことだと思う。しかし、Kellyの「いつも笑っていないさい。」という言葉は相手がどう思っているのだろうか、そればかりを気にして謝っていた私を安心させてくれた。

友達になってくれて、ありがとう

木曜日にトロントにあるLeanneの弟の家に泊まっていたJuliaを、Leanneと一緒に迎えに行った。それがJuliaと私の初めての出会いだった。Juliaと仲良くできるのかに私のカナダでの思い出が良いものとなるか、悪いものとなるか懸かっていた、といっても過言ではないほど、私はJuliaと仲良くなれるのかに不安を抱えていた。

そんな不安とは裏腹にJuliaはとても優しい子だった。得意のバスケットボールを教えてくれ、全然できない私のためにバスケットボールを低くしてくれた。私が学校から帰ってくる時はWiの準備をして待っていてくれた。日本語と英語をどちらも話せるなんてすごいねと言ってくれた。一緒に大好きなアーティストの話をしてくれた。Maggieと遊んでいた赤毛のJuliaは、まるで大自然の中を駆け回る赤毛のアンのように見えた。理解できない私のために何度もゆっくり発音してくれた。

私は、Juliaと出会って、この世にはこんなにも良い子がいるのかと驚いた。分からないことがたくさんあった私を友達として支えてくれたJuliaに、私は国境や言葉の壁を超えた友情を感じた。

受け入れてくれて、ありがとう

ホストファミリーと過ごす週末、Leanne は私たちを自分の実家に連れて行ってくれた。グランパの家は湖の目の前にあって、湖で泳いだり、ボートにのせてもらったりした。たとえ英語の意味が分からなかったときでも、みんなの笑顔と楽しそうな話し声を聞いているだけで、私も最高に楽しかった。

グランマとグランパは Leanne と同じ優しい笑顔で、私が話し終わるまで、どんなに時間がかかってもずっと待っていてくれた。グランマ達が私に最高の思い出をくれた。Leanne や Julia だけでも十分だったカナダの人々の優しさが、すてきなおじいさんとおばさんによって再び私に注がれた。

怒ってくれて、ありがとう

二週間目の月曜日、ホストファミリーが現地の寿司屋に連れて行ってくれた。日本語で注文してみると言われたが、私にはその寿司屋の店員さんが皆中国人に見えた。「多分彼らは中国人だと思う。」と私が言うと、Leanne は少し困った顔をして「もしあなたがよければ、彼らが本当に日本人じゃないのか確かめてみて。」と言ったので、確かめてみるとやはり彼らは中国人だった。

それを知った Leanne はいつもの陽気さからは想像がつかないほどの剣幕で怒り始めた。彼女は、日本人レストランと書いてあるのにも関わらず、寿司を作っている人や、店員が皆中国人なのはおかしい、私達には中国人と日本人の違いは分からないのだからこれは詐欺だと言った。Julia は恥ずかしくて止めて欲しがったけれど、私は Leanne が怒ってくれたことがとても嬉しかった。日本の文化を理解し、大切に思ってくれているように感じたからだ。もし、そ

の店に中国人レストランと書いてあって、中華を作っている人や店員が皆日本人だったら、Leanne は同じように怒っただろう。

さっきは怒ってごめんね、とハグしてくれた時、Leanne の元でカナダの文化を学ぶことができて、日本の文化を伝えることができ、本当に恵まれていると思った。私も Leanne のように自分の国ではない外国の文化も大切に思い、これは間違っていると胸を張って言える人になりたいと思う。

Leanne は、「このおかしな話をバリー中に伝えよう、きっと笑い話になるね。」と言った。Leanne や Julia にとっては、いつもは優しくして、陽気なママが珍しく怒った笑い話かもしれない。でも、私にとっては、いつも優しくして陽気なホストマザーが勇敢に、こんなことは間違えているのだと主張し、日本の文化を大切に思っていることを垣間みた大切な自慢話なのだ。

「言われてみれば、日本の箸はこの店の箸よりもっと短いし、日本人はこの店の店員よりもっと親切だよ。」と怒りながら言ってくれた Leanne の姿を思い出すと、今でもとても嬉しい気持ちになると同時にこんなにも素敵なホストマザーを持てたことを誇らしく思う。

ビッグハグをしてくれて、ありがとう

Leanne に急遽用事ができてしまい、金曜日の夜は家に泊めてもらうことができなくなってしまったので、金曜日の夜のフラワーエルパーティーが、私たちが会える最後の時となった。

そして、フラワーエルパーティーが始まり、後ろの保護者席を振り返ると、Leanne が手を振ってくれた。大好きな学校の先生、Miranda とアシスタントの Gillian が卒業証書をくれた時、その後 Leanne が待っていてくれてハグをしてくれた時、Miranda の指揮に合わせて歌を歌った時、溢れ出る涙が止まらなかった。初めての

ホームステイで、不安もたくさんあったし、初めのうちは二日間が二ヶ月間に感じた。Jackとはなかなか打ち解け合えず、寂しい思いもした。(虫と餌のお陰で最後はとても仲良くなれた。)でも、溢れ出る大量の涙と一緒に、私の辛かった記憶は全て流れ出て、良い記憶へと変わったように感じた。

式の後、Leanneはすぐに帰らなければならなかった。ビッグハグをしようと言って、浴衣姿の私を「あなたは本当にかわいいわ。」と言いなながらぎゅっと抱きしめてくれた。苦しいくらいに、ずっと抱きしめてくれた。言葉が全て通じなくても、Leanneの体から伝わるぬくもりと、緑色の瞳にたまったあの涙が彼女の優しさの全てを教えてくれた。

Leanne達と普通よりも一日早く別れなくてはならなかったのはとても悲しかったが、その日はKellyが家に泊めてくれ、土曜日の朝もKellyの家でホームステイしていた友達と一緒に空港までの迎えのバスがきている学校まで送ってくれた。Kellyとそこにホームステイしていた友達の優しさを感じた。

### 一年分の涙

ホストファミリーと一緒にいられる最後の朝、Heatherの家も一緒に集まり、皆でパンケーキを作って食べた。集合の時間ギリギリになっても、皆おかまいなしにおしゃべりを続け、食べ続ける。カナダ人は壁に掛かっている時計が見えないかのようにのんびりと、ゆっくりと自分の中の時計の針を進めていく。私はそんなおおらかなカナダ人が好きだ。

学校に着いた。楽しい思い出で一杯のはずの学校も、この日ばかりは暗く寂しく見えた。Leanneはそこにはいなかったが、KellyもHeatherも本当によくしてくれて、この時も涙が止まらなかった。帰りたくない。心からそう思った。

「この二日間で一年分泣いたね。」と先生や、友達、ホストファミリーから言われた。でも私にとって、こんなにもたくさんすばらしい思い出と、自分を強くしてくれた自信と、大切な第二の家族をくれたこの語学研修が終わり、現在から過去の思い出となってしまいうのに、あれだけの涙では全然足りなかった。それほど、私のこのカナダ語学研修ははじける笑顔と、大量の暖かい涙であふれていた。

シングルにするという決断

私は初め、ダブルとしてこの語学研修に参加する予定だった。しかし、二人で何度も話し合った末にダブルを解消してシングルとして参加するという結論に至った。正直、ダブルからシングルに変えた時は、一人でやっていけるのだろうか、大丈夫なのだろうかという不安との格闘だった。カナダに来てからも「やっぱりダブルが良い。」とあの時言っていたら、とダブルでの参加を解消したことを後悔したことも何度かあった。けれど、二週間を終えてみて、今はそんなに不安だったのに、シングルで乗り切ったことに達成感を感じている。そしてなによりも嬉しかったことは、ダブルと一緒に参加する予定だった友達と、お互いのホームステイ先での楽しかった話を、言い合えたこと、聞き合えたこと、「シングルでも大丈夫だったね。」と笑って言い合えたことだ。今はシングルで参加して本当に良かったと思っている。

あなたが一番

ホームステイ中、Leanneによく言われた言葉があった。それは「あなたは友達という時間が一番楽しいのよね。」だ。私にはその言葉の奥に、「私というよりも友達という方が楽しいのよね。」という



意味を感じずにはいられなかった。確かに、母国語が通じて、日頃から仲の良い友達と会った時、とても安心したし楽しかった。けれど私は Leanne といる時間が一番楽しい、一番好きなのだ。結局最後まで彼女に伝えられなかったことをとても後悔している。伝える勇気が出せなかった自分を何度も責めた。もう一度会えた時には言おうと思う。私が下手な英語を振り絞った時、Leanne が優しく答えてくれて会話ができたことが本当に楽しかったことを。他の誰と過ごすどの時間よりも一番楽しかったことを。あの緑色の優しい目を見てちゃんと言おう。この気持ちを本人に直接伝えることが、私の高一カナダ語学研修のゴール地点だと思っている。